陰肉奉納祭　前日譚

n e l e n e l e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
陰肉奉納祭　前日譚

【Ｎコード】
Ｎ８８９５ＨＰ

【作者名】
ｎｅｌｅｎｅｌｅ

【あらすじ】
【陰肉奉納祭】
それは代表に選ばれた人間の生殖器を神に捧げ、一年の豊作を祈る儀式の事。
男の子なら陰茎を切断、女の子なら大陰唇からクリトリスにかけての外性器を削ぎ落として奉納する事となる。
そんな儀式の代表に選ばれた女の子のお話になります。

２０２２／１０／２追記

続編となる当日編を投稿しました：ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２５５９ｈｗ／

またそれに伴い本作品のタイトルも微修正しています

２０２２／１０／２２追記

更に続編となる後日談を投稿しました：ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０３８９ｈｘ／

※この作品はｐｉｘｉｖにも同じものを投稿しています

（前書き）

【陰肉奉納祭】
それは代表に選ばれた人間の生殖器を神に捧げ、一年の豊作を祈る
儀式の事。
男の子なら陰茎を切断、女の子なら大陰唇からクリトリスにかけて
の外性器を削ぎ落として奉納する事となる。

そんな儀式の代表に選ばれた女の子のお話になります。

２０２２／１０／２追記
続編となる当日編を投稿しました：ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅｌ１
８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２５５９ｈｗ／
またそれに伴い本作品のタイトルも微修正しています

２０２２／１０／２２追記
更に続編となる後日談を投稿しました：ｈｔｔｐｓ：／／ｎｏｖｅ
ｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０３８９ｈｘ／

※この作品はｐｉｘｉｖにも同じものを投稿しています

クチュ……クチュ……

「んぅ……うぅっ……！　あぁぁっ！！」

ある日の昼下がり、アタシしか居ない部屋の中にいやらしい水音と快楽に震える女の嬌声が響き渡る。

まだ明るいうちから堂々とオナニーに耽っているのには理由があって、それには先日届いたこんな手紙が関係していた。

《おめでとうございます。今年行われる陰肉奉納祭のカゲニエに、沙恵香様が選定されました。》

陰肉奉納祭とはその名の通り陰部の肉、つまりは生殖器を神様に奉納して一年の豊作や幸福を祈るお祭りの事。

カゲニエはその時二十歳前後の人間から男女交互に選定され、男の子の場合は陰茎を切断、女の子の場合は陰唇から膣口にかけてといった外性器全体をまとめて削ぎ落として奉納するのだ。

カゲニエに選ばれた事自体はとても名誉な事だから嬉しく思う気持ちは確かにあるし、家族や友達だって栄誉な事だと喜んでくれた。

それに今までの奉納祭で、カゲニエに選ばれた人達がみんな誇らしそうにしている様子だってずっと見てきている。

でもやっぱりおまんこが無くなってしまうのはとても怖いし悲しいから、そんな気持ちを少しでも紛らわす為にアタシは日夜オナニーを繰り返してしまう。

クリクリ……クチュックチュッ……

（クリトリス……気持ち良いっ！ビラビラだってもっと触って憶えておかなきゃ……！）

「あっ……あぁっ、あんっ！……んっ！イクっ……イクぅっっ！！あああぁぁぁん！！！」

もうすぐ失われてしまうクリトリスの快感やおまんこの感触をなるべく記憶に刻み込みたいと考えながら、今回もまた派手に絶頂したのだった。

「はぁ、はぁっ……奉納祭まであと十日、それまでにアタシはあと何回オナニー出来るんだろう……？」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「以上が奉納祭の流れになります」

陰肉奉納祭まであと一週間となった今日、奉納祭の会場に呼び出されたアタシは儀式担当者の男性から段取りを教えてもらっていた。担当者さんの説明はとても丁寧かつわかりやすくて、特に疑問に思うような事もなくあっという間に全ての説明が終わる。

「では最後に何か質問などはございますか？」

「その……傷の処置ってどんな感じになるんでしょうか？縫ったりとか？」

質問はと言われると、やっぱりおまんこが切り取られた後の状態についてが気になってしまう。

本当はもっと具体的に「トイレはどうすればいいか」とか「エッチな事は出来るのか」とかを教えてほしかったけど、男性相手に聞くのは流石にちょっと恥ずかしくて言葉は結構ぼかしてしまった。

「それについては私よりも千春さんに聞いてもらったほうが良いと思います」

「千春さん、ですか？」

「はい、元々この後に会っていただく予定でしたし、そこで教えてもらって下さい。他に質問はありますか？」

傷の処置については千春さんという人が教えてくれるらしい。

他に聞きたい事は思いつかなかったので、担当者さんとの会話はこれで終わりにしよう。

「わかりました、他は特にありません」

「私からはこれで終わりとなります。千春さんは向こうの部屋で待っていますよ」

お互いに席を立った後、担当者さんは奥にある部屋の扉を指し示してくれた。

千春さんってどんな人なんだろうと考えながら入った部屋は畳張りの和室になっていて、そこにはアタシとあまり歳が変わらなさそうな女性が一人、座布団に座っていた。

「始めまして。あなたが今年のカゲニエに選ばれた子ね、私は千春よ」

「始めまして、千春さん。アタシは沙恵香です」

女性の前に用意されていた座布団に座り、アタシと女性は挨拶を交わす。

部屋の中に一人しかいなかった時点でわかっていたけれども、やっぱりこの人が千春さんのようだ。

さっき担当者の人に聞けなかった事についてを早速質問させてもらう。

女性同士なので内容についてももう少し具体的に聞けるのもありがたい。

「あの……アソコを切り取った後ってどんな感じになるんですか？その、トイレとか生理とか……」

「その事なら……口で説明するよりも見てもらったほうが早いわね」

そう言うやいなや千春さんはおもむろに立ち上がり、履いていたスカートを躊躇いなく脱ぎ捨てた。

突然の事態に驚いたアタシは、下着を見るわけにはいかないと思い

慌てて視線を逸らす。

「ちょっ！？いきなり何やってるんですか！？」

「女同士なんだしそこまで慌てなくてもいいじゃない。見たほうがわかりやすいわよ？」

アタシからの抗議なんてどこ吹く風で、千春さんは脱衣を続けていく。音と気配から、下着までを全部脱いでもう一度座り直したのがわかる。

おまんこを見ながら説明してもらったほうが、口頭だけで説明されるよりもわかりやすいのは確かだろう。

だったら実物じゃなくて写真やイラストでも良かったんじゃないかとは思いつつ、覚悟を決めて視線を千春さんの元へ戻していく。

「ほら、準備できたわよ。そんなに恥ずかしがらないで……ね？」

「わかりました、見せてもらいま……っ！えっ！？千春さん！これって……！？！？」

しかしそんな〝他人のおまんこをじっくりと見る〟なんて覚悟は、目に飛び込んできた衝撃的な光景にすべて吹き飛んでしまった。

千春さんの両足の間には女性だったら誰しもにあるはずの割れ目やその奥の粘膜が存在せず、太ももやお腹と変わらないような普通の肌で覆われているだけだったのだから。

人間ではなくマネキンと言ったほうがしっくり来てしまうような股間の光景に驚いて固まったアタシをよそに、千春さんはクスクスと笑いながらさらに両足を拡げていく。

自らの股間を堂々と見せつけるという普通なら扇情的なはずのポーズは、女性器が失われているという事実によってとても物寂しく見えてしまっていた。

「ふふっ、びっくりしたかしら？」

「なんでこんな……おまんこが付いてないじゃないですか…………あっ！まさか！？」

「そう、私は2年前のカゲニエだったのよ。おまんこを切り取った後のお股は周りの皮膚を縫い合わせて、こんな風に綺麗に整えてもらえるの」

カゲニエの先輩である千春さんの股間がこうなっている以上、アタシの股間ももうしばらくすれば同じ状態になってしまう。
実際におまんこが無くなったその場所を見てしまった事で、今まではぼんやりとしかイメージ出来ていなかった〝おまんこを失う〟という事態に対する現実感が一気に膨れ上がり、その恐怖に身体が震え始めた。

「沙恵香ちゃん震えてるの？怖くなっちゃった？」

「違いま……いえ、はい。おまんこ無くなっちゃうの怖いです……」

「そりゃそうよね、女の子にとって大切な場所ですもの。私だって怖かったわ。でも安心して？さっき聞いてくれたトイレだって生理だって問題なくこなせるんだから」

怖がるアタシを安心させるように、優しい言葉をかけてくれる千春さん。

割れ目すら存在しないのっぺりとした股間を自らの指で指し示し、詳しい説明を始めてくれる。

「ほら、よく見て。ここと、ここ、穴がふたつ縦に並んでいるでしょう？」

「あっ、これですね……もしかして、上が尿道で下が膣ですか？」

「よくわかったわね、正解よ。こうやって出口がちゃんと残っているからトイレも生理も大丈夫なの。まぁ多少は勝手が変わるから慣れる必要はあったけどね」

ひと目見ただけでは気付かなかったけど、千春さんの言う通りそこには小さな窄まりがふたつ存在していた。

考えてみれば膣や尿道はおまんこから内臓までを繋げている管なのだから、おまんこを切り取られた後にも穴が残っているのは当然の事。つるつるな肌の中にポツンと残ったふたつの痕跡は「ここにはちゃんとおまんこが付いていたんだよ、忘れないでね」と静かに主張しているようにも感じられてしまう。

失われてしまったおまんこに思いを馳せていたアタシに構う事無く、千春さんは膣の窄まりを両手で拡げて更に説明をしてくれる。

「それにね、膣の方はこうやってちゃんと拡がるようになっているのよ」

「うわっ、結構拡がるんですね……中もちゃんとピンク色の粘膜ですし……」

「ええ。指はもちろん、男の人のおちんちんだってちゃんと挿入出来るわ」

「おっ……！？おちんちん……」

「あら、そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃないの。おまんこ取られた後にエッチな事が出来るかどうか気になってるんでしょ」
さらっと飛び出した直接的な単語に変な反応をしてしまったけれど、エッチな事について気になっていたのは確かだ。
もうここまで来たら気になる事は全部聞いてしまおうと覚悟を決めたアタシは、羞恥心を投げ捨てて千春さんとの会話を続けていく。

「いやまぁ……確かにオナニーとかセックスとか、そういう事が出来るのかどうかはすっごく気になってました」

「じゃあひとつずつ私のわかる範囲で教えてあげるわね。まずはオナニーについてだけど、これに関しては流石にそれまでと同じようにとはいかなくなっちゃうのよね。特にクリトリスが無くなっちゃう影響は大きいわ」

「やっぱりそうなんですね……あっ！クリトリスって身体の中に埋まってる部分が結構あるって聞いた事があるんですけど、そこは気持ち良くないんですか？」

「陰核脚まで知ってるなんて案外詳しぃのね。でも残念、陰肉奉納祭ではそういう埋まってる部分も根こそぎ取っちゃうから、クリトリスで気持ち良くなる事は絶対に出来なくなっちゃうわ」

「うぅ……そんな……いつもはクリトリスを使ってオナニーしてたので大変そうです……」

クリトリスが無くなる、もう二度とクリトリスで気持ち良くなれない。
覚悟はしていた事だけれども、実際に言葉として聞かされると喪失感がより重くのしかかってくる気がした。
「だからカゲニエに選ばれた人はみんな、頑張って他の性感帯を開発するの。膣とか乳首とか、場合によってはお尻や尿道を使う子もいるわね」
「お尻まではなんとなく理解できますけど、尿道っていうのは凄いですね……」
「流石に尿道は少数派だから気にしなくていいと思うわ。最初は膣の開発をするのがオススメよ」
クリトリスが無いなら膣を使えばいいという理屈は理解出来るしアタシもそう考えたから、あの手紙が来てからのオナニーではなるべく膣を使うように心掛けていた。
でも自分で膣内を弄っていても快感はそんなに感じられないせいで、最終的にはいつもクリトリスに頼ってしまうのがアタシの悩みになっているのだった。
このままじゃ駄目だと思ってはいるけれどもどうすれば膣でイケるのかわからなくて、アタシは千春さんに助けを求めてみる。
「中イキってやつですよね。カゲニエに選ばれてから色々と試してはいたんですけどあんまり気持ち良くなくて……Ｇスポットとかがわかればまた違うんでしょうか」

「うーん、実はカゲニエの女の子ってＧスポットを使えないのよね。あれはクリトリスを裏から刺激できる場所の事だから、クリトリスが無くなっちゃった後だと意味が無いの」

「えっ、Ｇスポットってクリトリスと関係あったんですか！？　そこが駄目なら膣のどこを使えば良いんでしょう……」

「そうね、ポルチオって呼ばれたりもする子宮口の部分とか、そこよりもちょっと奥にある膣の行き止まり部分とかが敏感で気持ち良いのよ。沙恵香ちゃんは一番奥まで何かを挿れた事はあるかしら？」

「いいえ、無いです。一番奥が気持ち良いなんて全然知りませんでした」

千春さんに教えてもらって良かった。一番奥なんて発想はアタシ一人じゃ出てこなかったと思う。
一番奥はこの辺だろうかとおへその下に指を当ててみても今はまだ実感が湧いてこないけど、今後の方針が見えたのはとても有り難かった。

「だったらこれから開発しないといけないわね。帰りにでもこういうディルドを買っておくと良いわ」

「うわっ、長っ……それにそのディルド、なんか柔らかそうです」

「そうなの。このディルドはただ長いだけじゃなくてよく曲がるから、膣の形に合わせて簡単に奥まで挿れられるのよ」

彼女が取り出したディルドの長さに思わず息を呑んでしまう。
まるで蛇かなにかの様にグネグネと形を変えるそれは、確かにアタ

シの一番奥まで簡単に届きそうだと思えた。

千春さんは一通り説明の終わったディルドを横に置いて、次の話題に移っていく。

「次はセックスについてだけど、これは膣がある以上そこまで困らないわ。おちんちんを挿れる事が出来て、ちゃんと締め付けられる穴さえあれば男の人としてはあんまり問題が無いみたいよ」

「でも、おまんこが無いのを気持ち悪がられたりとかは……」

「露骨にって事は無いわね、カゲニエが名誉ある役割だってことは相手もわかってくれてるから。まぁ最初は驚かれるし、なんならそのまま萎えちゃう人も居るんだけどね」

「相手が萎えちゃった時ってどうするんですか？」

「手とか口とかで勃たせられるなら続けるけど、駄目ならもうそこで終わりになるかしら。お互い無理して続けても辛いだけだし」

薄々わかっていたしおまんこが無い以上当然の話だとも思うけれど、実際におちんちんが勃たない事もあると聞かされると自分の女が否定されるようで悲しくなってしまう。

今後の人生でアタシの恋人となった人が、カゲニエの身体に興奮してくれなかったらどうしようなんていう不安すらも湧いてくる。

そんなアタシの不安に気付いてくれたらしい千春さんは、アタシを安心させるかのようにセックスについての話を続けてくれた。

「だから他のカゲニエ経験者の中にはセックスの時は電気を消して、

常に自分がリードするようにしてる人も居るのよね。直接お股を見られさえしなければ案外バレないらしいわ」

「それも極端ですね、でもアタシもその方が良いかも……」

「あとこれは聞いた話なんだけど、逆に大興奮しちゃうような変態さんとかも居るみたいなのよ。割れ目の無くなったお股を撫でてるだけで高まりすぎて射精しちゃったりするんですって」

「撫でるだけで射精までするなんてそれも凄い……性癖は本当に幅広いです」

おまんこが無い事に気付かれる事なくセックスする方法や萎えるどころか逆に興奮する人の話を聞く度に、アタシの不安は少しずつ取り除かれていく。

こわばっていたアタシの表情が落ち着いてきたのを確認した千春さんは、いたずらっぽい笑みを浮かべて更に話を続けてくれる。

「それにね、セックスの時に気持ち良いのは男の人だけじゃないのよ？さっき言った通り私達も一番奥で気持ち良くなれるの」

「え……？でも一番奥っておちんちんじゃそう簡単に届かないような……」

「それがね、結構簡単に届くのよ。おまんこを削ぎ落とされてる分だけ膣が短くなってるんだから」

「あっ、そっか……確かに言われてみればその通りですね」

「だからズンズン奥まで突かれるのが好きって子だと、おまんこ無くなった今の方が気持ち良いセックスが出来るなんて意見もあるわね」

思い返してみれば、今までの陰肉奉納祭で見てきた切り取られた後のおまんこは確かに結構な厚さがあったし、さっき見せてもらった千春さんの股間も結構窪んでいた。
普通なら相当大きなおちんちんじゃないと届かないはずの一番奥も、膣が短くなった後なら平均サイズで十分届くようになるのだろう。
アタシ自身は奥まで突かれるのが好きってタイプでは無いけれど、不安な事ばかりが思い浮かんでいた今後のセックスライフにわずかでも希望が見えたのは単純に嬉しかった。

「後は……赤ちゃんを産む時の話かしらね。これも帝王切開が必須になるって事以外は普通と変わらないのよ」

「帝王切開ってお腹を切って赤ちゃんを取り出すやつですよね、なんでそれが必須なんですか？」

「私達のお股って普通のおまんこと違ってただの皮膚で覆われてるだけだから、膣がそこまで広がらないの。おちんちんくらいの太さなら挿れられても、赤ちゃんは流石に通らないわ」

陰肉として奉納するのは外性器部分だけで、赤ちゃんを産むために必要な子宮と卵巣はお腹の中にそのまま残っている。帝王切開も今や当たり前に行われている事だし、アタシとしても抵抗は特に無い。だっておまんこを抉り取られる事に比べれば、お腹をちょっと切るのなんて大した事無いでしょう？

「なるほど……というか千春さん、他のカゲニエの人について色々話をしてくれましたけどカゲニエ同士って連絡取り合ってたりするんですか？」

「そうそう、カゲニエだけのグループチャットがあるって事を伝えるの忘れてたわ。カゲニエ女子だけのグループとカゲニエ男子だけのグループ、あと男女共通のグループって感じで大きく分けて３つのグループがあるの」

「だから色々と詳しかったんですね」

「参加するかは自由だけど教えて貰える事もあるだろうしとりあえず入っておくのをオススメするわ。これがそのグループね」

千春さんがスマホで見せてくれたメッセージアプリの情報をアタシのスマホに入力し、カゲニエ女子とカゲニエ全体という名前のグループに参加する。

おまんこを切り取られるなんていう普通じゃありえない事態も、同じ経験をした沢山の先輩が居るんだと思うと心強かった。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「そうだ沙恵香ちゃん、せっかくだから面白いものを見せてあげるわね。ほら、この写真よ」

連絡先の交換を済ませた後もそのままスマホを操作していた千春さんが、そんな事を言って画面をアタシに見せてくる。
彼女のスマホに表示されたその写真には綺羅びやかな装飾が施された豪華なお盆と、その上に乗った色の薄いアワビのような物が写っていた。

これは何なのだろうかと少しの間考えた後、正解に思い至ったアタシは驚きの声を上げてしまう。

「ん……？ってこれおまんこじゃないですか！？しかも切り取られちゃってますし！！」

「ええ、これは奉納祭の最中に撮った私のおまんこなのよ。もうお別れになっちゃうし記念に撮影したの」

「という事はこれが……一昨年まで千春さんに付いていたおまんこなんですね……」

「そうよ、産まれた時から一緒に育ってきてずっと使い続けてきた私の大切なおまんこなの。これが最後の機会になっちゃうし、悲しむだけじゃなくてちゃんと記録を残しておこうって奉納祭が始まる前から決めていたのよ」

さっきまで見せてもらっていた割れ目が無くつるんとした千春さんの股間と、スマホの画面に写った切除直後のおまんこ。
彼女の股間から永遠に失われてしまった物が画面の中だけに残っていると思うと不思議な切なさが感じられる気がした。

「他にも色々と撮ってたから見せてあげるわね。これが切り取ったおまんこの裏側の写真で、こっちの写真達はおまんこを手に持って

自撮りしたやつなの。途中から変にハイな気分になって沢山撮っちゃったわ」

そう言って千春さんが見せてくれたいくつもの写真はどれもこれもがアタシにとってとても衝撃的な光景だった。

真っ赤な肉が丸見えになった裏側の切断面は単純にグロテスクさを感じてしまったし、切り取った後の肉を手に持っての自撮り写真は顔とおまんこが隣同士にあるという普通では絶対あり得ない距離感に頭がクラクラしてきてしまう。

特におまんこ肉と自撮りしたツーショットについてはいろんなパターンで何枚も撮っていたようで、ただ持ってるだけの物以外にも割れ目をくぱぁと開いて中のビラビラやクリトリスまでをはっきりと見せている物、膣の部分に空いた穴を大きく拡げたせいでその奥の風景までが見えてしまっている物、裏側の膣部分に指を2本突き入れておまんこからピースサインを生やしている物など、とんでもなく倒錯的な写真が彼女のスマホに大量に保存されていた。

そしてそれらの写真に写った千春さんの表情が何故か全て笑顔だったことも、女性として大切な部分を失った直後という辛いはずの状況とのギャップとなってアタシの心をかき乱してくる。

「なんて言ったら良いのかわかりませんが、どれもすごい写真ですね……千春さんの顔も笑ってますし……」

「おまんこ失った直後で悲しいはずなのに不思議よね？自分でもおかしくなってた自覚はあるのよ。その証拠にほら、こんな動画も撮っちゃってるし」

「うわっ、すごっ……おまんこにキスして…………わわわ……！思

いっきり舐めちゃってる！！」

千春さんが見せてくれた動画には自分のおまんこ肉に口づけし、一心不乱に舐め回す彼女の姿が映っていた。

膣口に突き入れた舌が裏側の切断面から飛び出す所までしっかりと撮影されたセルフクンニの映像は、さっき見せてもらったおまんこ貫通ピースの写真よりもずっとずっとエッチに見えてアタシの方もドキドキしてきてしまう。

アタシの目が動画に釘付けになっていると、千春さんは動画を撮った時の心境を詳しく説明し始めてくれる。

「おまんこを舐めるなんて経験は流石に初めてだったけど、自分の物だからか抵抗は全然なかったわね。切り取った後にちゃんと洗ってくれてたから血の味とかもしなかったわ」

「こんなに一生懸命舐めて……まさか気持ち良かったりは……しないですよね？」

「当たり前よ、切り離されてるんだから気持ち良いわけないじゃない。でも舌で感じるおまんこの形や感触とか、舐めてるのに股間は何も感じないって事がなんとなく面白かったのは覚えてるの」

「悲しくはなかった感じなんですね…………あれっ？でも動画の最後にちょっと涙が見えたような……？」

「最初は面白さが勝ってたから悲しいって気持ちが麻痺してただけよ。舐めてるうちに段々と『おまんこ本当に無くなっちゃったのね……』とか『まるでお別れのキスみたい……』なんて事を考えられるようになって……そこからはもう駄目。落ち着くまでずっと泣き

崩れてたわ……」
「そうだったんですね……変な事聞いちゃってすみませんでした……」
「ううん、気にしなくていいのよ。確かにとっても悲しかったけど、おまんこの事を忘れたくないっていうのも紛れもない本心だもの」
これまではずっと穏やかに、そして時々いたずらっぽく語ってくれていた千春さんも、この時に限っては口調に少しだけ暗い物が混じっていた。
今まであまりにも普通の事として話していたから忘れかけていたけれど、女性としての大切な部位を失って平気でいられる訳がないんだから当たり前だ。
そして彼女が経験した悲しみや喪失感は、一週間後にアタシも身をもって体験する事になる。
「アタシにももうすぐ同じ事が起こるんですよね……やっぱり泣いちゃうんでしょうか？いえ、絶対泣いちゃいますよね……」
「そうね、泣くななんて言えないし言わない。だから今の内にやれることは全部やって、ちゃんとおまんことお別れを済ませておくの。写真や動画だって後からじゃ撮れないんだから、恥ずかしがらずにちゃんと記録として残しておくといいわ。もちろん切り取られちゃう前の姿も、ね？」
「切り取られる前の姿ってつまり……今のうちに撮影しておく、とかですか？」

「正解。私の時もこんな感じでいっぱい撮ってたのよ」
千春さんがスマホを操作すると、さっき見た物とは違うおまんこのドアップ写真が表示される。
そのおまんこは奉納祭のお盆だったり手の平だったりに乗せられている事は無く、両足の付け根という正しい位置で身体とちゃんと繋がっていた。
「おまんこのすべてを残しておこうって思ったから本当に沢山の写真や動画を撮ったわ。閉じた所、拡げた所、クリトリスも小陰唇も尿道口も膣口も……ありとあらゆる場所と状態の記録しておきたかったの」
「だからこんなにいっぱい、しかもおまんこだけじゃなくて全身が写ってるヌードまであるんですね」
「ヌードどころかオナニーだってしっかりと撮影しているわよ。充血して拡がった割れ目も、愛液でヌルヌルに濡れた粘膜や小陰唇も、興奮で勃起してるクリトリスも、そのどれもが大切な私のおまんこですもの」
両足を閉じた股間にぴっちりとした一本のスジだけが見えている物や、逆に開いた足の間に少しだけ小陰唇がはみ出した割れ目が見える物、更には指で割れ目を大きく拡げて中身がすべて丸見えになっている物といったおまんこの拡大写真。
小陰唇やクリトリスの皮を指でつまんで限界まで引っ張ったり、捻ったり、捏ね回したりとまるで女性器で遊んでいるような写真。
おまんこを両手でくぱくぱと開閉させている様子や、呼吸にあわせて膣口が開いたり閉じたりする様子、クリトリスがだんだんと勃起していく様子をドアップで撮影した動画。

豊満なおっぱいや引き締まった腰、傷一つ無い美しい肌を惜しげもなくさらけ出し、こちらを挑発するようにエッチなポーズを取っているヌード写真。
濡れそぼった膣の中に指やバイブを挿入したり、クリトリスにローターを当てたりしているオナニーの写真。
クチュクチュという水音を立てながらおまんこを弄り回し、艶めかしい喘ぎ声をあげているオナニーの動画。
何も知らない人が見たらただのエッチな自撮りとしか思えないそれらの写真や動画だけど、事情を知った上だとおまんこの遺影のようにも見えてしまった。
「私のおまんこコレクション、どうだったかしら」
「なんていうか、ちょっと複雑な気分です。記録に残しておくのが大切だっていうのもわかりますけど、後から見返しても辛いだけなんじゃないかとも思っちゃいました」
「確かにカゲニエの中には、失った性器についてを思い出す事すら辛いって言ってる人も居るわね。でも沙恵香ちゃんがもしそうだった場合はその時にデータを消せば良いだけだし、とりあえず一度撮影しておくのが良いと思うわ」
「そうですね、アドバイスありがとうございます」
奉納祭の後、記録しておいたおまんこの写真や動画を見た時にアタシが何を感じてしまうのかは正直な所まだよくわからない。
無くなったおまんこのことなんて綺麗さっぱり忘れてしまったほうがいいのか、それともちゃんと思い出として記憶の中に残しておくほうがいいのかなんてすぐに判断できるわけがないし、これから時

間をかけて考えていかなきゃいけない事なんだろう。
だからこそ先輩からのアドバイスにはちゃんと従っておこうと決意したのだった。

これからの事を真剣に考え込んでいると、千春さんがまたあのいたずらっぽい顔をしてアタシに話しかけてくる。

「そうそう、写真を残しておけばこんな事も出来るのよ」

スマホの画面におまんこの拡大写真を表示させ、小さな穴しか残っていない股間の上にそのスマホを乗せる千春さん。
ただの写真である以上そこにあるのは偽物のおまんこだけど、その元となっている物は2年前まで彼女の身体に付いていた正真正銘の本物。偽物とも本物とも言えてしまいそうなおまんこを股間に取り付けて微笑む姿に、アタシの頭は大いに混乱してしまう。

「ほら、こうすれば見た目だけとはいえおまんこが戻ってきた感じがするでしょ？」

ちょっと楽しそうに投げかけられたその問いかけに、混乱したままのアタシは結局何も答えることが出来なかったのだった……

――

「そういえば沙恵香ちゃんってまだ私のお股を触ってなかったわね。

どう、触ってみる？」

「うぇ？　さっ、さわっ！？」

ランチにでも誘うかのような気軽さで割ととんでもない発言をした千春さん。

さっきまでの混乱がようやく落ち着いてきた所に不意打ちを食らった形になって、アタシはつい素っ頓狂な反応をしてしまった。

「慌てちゃって可愛いわね。さっきまで散々見てたくせに今更でしょ」

「それは……そうですけど……」

「で、どうなの？　触りたいかしら？」

「……はい、正直触ってみたいです」

突然の提案に動揺してしまったけれど、おまんこの無くなった股間を触りたいという気持ちは確かにある。

実はいつ自分から頼もうかと悩んでいたぐらいだったので、千春さんの方から提案してもらえたのはとても有り難かった。

「じゃあ指だけ確認させてね…………うんうん、やっぱり爪はちゃんとお手入れされてるわ。毎日自分のを弄ってるからかしら？」

「なっ……！　なんでそんな事まで分かるんですか！？」

「だって私がそうだったもの。沙恵香ちゃんだってカゲニエに選ばれてからは少しでもおまんこを憶えておこうと毎日オナニーしてる

んでしょ」

「うう……その通りです……」

アタシの右手、特に中指の爪を念入りに確認して満足そうに頷いた後、千春さんは座っていた座布団ごとズリズリとこちらに近づいてきた。

爪を手入れしている理由までもを言い当てられた恥ずかしさで俯いていたアタシの視界に、彼女ののっぺりとした股間が映る。

「この爪の短さと丸さならナカに挿れても大丈夫だし好きなだけ触って良いわよ。あ、挿れる時はそこのローションを使ってね」

「はい、わかりました。失礼します……」

触りやすいようにと両足を大きく開いてくれた千春さんの股間に、アタシはおずおずと右手を伸ばしていく。

手の平全体で覆うようにその場所を触ると、自分の物に触れた時とは全く違う全体が窪んでいる感触が返ってきた。

（すごく窪んでる……ここまで抉り取られちゃってるんだ……）

そのままスリスリと撫で回してみてもなめらかな肌の感触が感じられるだけで、当然ながら割れ目の感触や大陰唇が引っかかるような感触は一切しない。

手持ち無沙汰だった左手を服の上から自分の股間に当てるだけでも、感触の違いがはっきりと分かるほどだった。

（本当に何も無い……アタシのおまんことはぜんぜん違う……）

「んふっ……他人に触られると流石にちょっとくすぐったいわね。大丈夫だから構わず続けてちょうだい」

時たまピクンと身体を震わせながらも触り続ける許可をくれた千春さんに甘えるように、更に股間を撫で回していくアタシ。

自分の股間に当ててただけのはずだった左手は、いつの間にか右手と同じように撫で回す動きに変わっていた。

「ところで沙恵香ちゃん、さっきからずっと左手で自分のお股を触ってるわね。私のと比べてるのかしら」

「えっ!?あっ、すみません!やっぱり全然違うなって思ったらつい……」

「別に気にしてないから謝らなくていいわよ。どうせだから直接触ったら?そっちの方がわかりやすいでしょ」

「流石にそこまでは……」

「ここには私達二人しか居ないんだし恥ずかしがる事ないじゃない。私だって色々見せてきたしお互い様よ」

「う……わかりました、ありがとうございます……」

そんなアタシの左手に千春さんが気付かない訳はなく、あのいたずらっぽい声でツッコミが入る。

慌てて自分の股間から手を離したアタシだったけれど、最終的にアタシの左手は下着の内側に潜っていく事になった。

クニュ……クニュ……

スリ……スリ……

左手と右手の動きをシンクロさせてふたつの股間を比較するように触っていく。

中指一本で下から上になぞり上げた時、左手にはぷにぷにの大陰唇に挟まれたりその奥のビラビラを掠めたりする感触があったけれども、右手では小さな穴ふたつをちょっと触っただけの感触しか感じない。

人差し指と中指で割れ目をくぱぁと拡げようとすると、左右の手で指の幅が全然違ってしまうのがわかる。

小陰唇を摘んで引っ張ってみたくても、そもそも右手には摘む場所すら存在しない。

股間の上の方を探るように指先でなぞると簡単に突起の存在がわかる左手と違い、いくら探っても突起の感覚なんて一切しない右手。

もしそこにクリトリスがあったのなら絶対に耐えられないはずの強さでグリグリと弄り回しているのに、全然反応を返してこない千春さんの身体。

実際に触ってみたら本当に何も付いていない股間の空虚感をとても強く感じてしまい、アタシも同じ股間になってしまうという恐怖感が一気に膨らみ始める。

特に、クリトリスが付いていたはずの場所を刺激しているのに全然気持ち良さそうじゃない千春さんの姿を見てからは、おまんこを失った後はもう一生気持ち良い事が出来ないんじゃないかという悪い方向への考えが止まらなくなっていた。

大切なおまんこが無くなってしまう、気持ち良い事が出来なくなっ

てしまう、しかもその状態が今後一生続く。
そんなネガティブな事を考え続けてしまったアタシは、ついに限界となって小さな子供のように号泣してしまったのだった。
「うっ、うぅ……やだ、やだよぉ……おまんこ無くなっちゃうのやだ……カゲニエなんてなりたくないよぉ………気持ち良くなれないなんてやだぁ………」
「そうよね、怖いわよね。おまんこ無くなっちゃうの嫌よね。私の胸を貸してあげるから好きなだけ泣きなさいな」
「ちはるさぁん……うぅ……うわぁぁぁぁぁぁん!!!!」
「大丈夫、私達だって同じなのよ。あなたはひとりじゃないわ。だから嫌なんて言わないで、カゲニエのお役目を頑張りましょうね」
「ひぐっ、ぐすっ……そう……ですよね………」
泣きじゃくるアタシを抱きしめて、千春さんはあやすように背中を優しく撫でてくれる。
暫くの間彼女の胸に顔をうずめてしばらく泣かせてもらう事で、なんとか心を落ち着かせることができたのだった。
「うん、落ち着いたみたいね、もう大丈夫かしら。怖くて泣いちゃうのはよくある事だから恥ずかしがらなくていいわよ」
「……ありがとうございます、もう大丈夫だと思います」
「外側の無くなっちゃった所ばっかりを触ってたら悲しい気持ちにしかならないわ。ほら、穴の中も触ってみて」

アタシの右手は千春さんの手によってローションを塗られ、そのまま彼女の股間まで誘導されていく。

ヌプププ……

誘われるがままに中指を小さな穴へと挿入すると、柔らかくてあたたかい膣壁特有の感触が返ってくる。
アタシ自身の膣と大きく変わらないその感触に、おまんこが無くても膣はちゃんとあるんだっていう実感が湧いてきてちょっとだけ安心できる気がした。

「んっ……どう？ナカは全然変わらないでしょ？」

今までは多少くすぐったそうな反応がせいぜいだった千春さんも、膣内を直接まさぐられると流石に平静ではいられないみたいで少しずつ呼吸が荒くなっていく。

「はい……柔らかくてあったかくて、アタシのと同じなんだって少し安心しました」

「もっと奥まで挿れてみて？周りと感触が違う所があるのがわかるかしら？」

千春さんの言葉に従って中指を更に侵入させていくと、かなり奥の方に膣壁とは明らかに異なる質感をした丸い部分がある事に気付く。
その部分はプリプリやコリコリとでも形容できそうな硬めの感触をしていて、指先で形を確かめてみると中央が少し窪んでいるのがわかった。

アタシ自身の膣内では感じた事がない初めての感触だったのもあり、

今自分が触っている物の正体が気になってしまう。

「ここですよね？なんかコリコリしていてちょっと癖になりそうな触り心地ですけど、これはなんなんですか？」

「んぅっ……これはね、子宮口なのよ。……あんっ！ここが敏感で……くっ……触られるととっても気持ち良いの……あぁん！」

「子宮口……実際に触るのはこれが初めてです。アタシのには届かなかったんですよね」

「大丈夫……くぅっ……おまんこを奉納した後は膣が短くなるから……んふぅ……沙恵香ちゃんも届くようになるわ……よっ」

敏感だという言葉の通り、コリコリした子宮口を弄り回していると千春さんの呼吸はどんどん荒くなっていき、身体は震え、膣はアタシの指をきゅうきゅうと締め付けてくる。

おまんこの無い身体でしっかりと気持ち良くなっている彼女の姿はアタシにとって希望のように見えたし、それだけじゃなくてこの部屋に来てすぐぐらいの時にしていた会話までも思い出させてくれた。

『ポルチオって呼ばれたりもする子宮口の部分とか、もっと奥にある膣の行き止まり部分とかが敏感で気持ち良いのよ』

『結構簡単に届くのよ。おまんこを削ぎ落とされてる分だけ膣が短くなってるんだから』

思い出した千春さんの言葉の中に気になった単語を見つけたアタシは、子宮口をまさぐっていた指を一旦止めて質問をする。

「そういえば最初の方で教えてくれましたね。その時にもう一つの性感帯として言っていた膣の行き止まりって子宮口とは違うんですか？」

「えぇ、実は違うのよね。子宮口って膣の一番奥とまっすぐ繋がってるんじゃなくて、ちょっとだけお腹側の方にずれた位置で繋がってるの。知ってたかしら？」

「いえ、そこまで詳しくは知りませんでした。膣の中ってそんな構造になってるんですね」

「だから子宮口とは別に一番奥って言える所があるのよ。手の平をお尻側に向けると触りやすいと思うわ」

「こう……ですか？」

言われた通りに右手を１８０度回転させ、中指をもっと奥まで挿入して膣の行き止まり部分に触れてみる。
触った側のアタシとしてはただの膣壁と変わらない感触しかしなかったのに、触られた側の千春さんの身体はびっくりするくらい大きな反応を返してくれた。

「あぁっ……そう、そこよ……んっ……そこが私の一番気持ち良いポイントなの……」

「すごい反応……軽く触っただけなのにさっきの子宮口と同じぐらい締め付けてきます……」

「んぅ……ここを指とかおちんちんとかでグリグリ押し込まれるのが大好きなのよ……はぁぁん！」

「締め付けだけじゃなくて濡れ方や熱さも凄いことになってますね……なんだかエッチな気分になっちゃいそうです……」

「エッチな気分、ねぇ？……そうだ、このまま私がイクまでやってくれないかしら？」

「えっ？イクまで？？」

段々と、でも確実にエッチな感じになっていく部屋自体の雰囲気に『このまま続けちゃって大丈夫なのかな』なんて事を考えていたら、千春さんがもっとストレートに大胆な内容のお願いしてきて驚いてしまう。

もう既に一番奥まで指を挿入しておいて何を今更ためらう理由があるのだろうかとか、でもイクまでなんてそれはつまりセックスだし軽々しくやっちゃ駄目なのではとか、でもでも確かにおまんこの付いてない身体で本当にちゃんとイケるのかは気になるしとか、そもそも女同士ではどこまでがセックスになるんだろうかとか色々な事が頭の中をグルグルと駆け回る。

「最近ご無沙汰だったのもあってスイッチが完全に入っちゃったみたいなの。一人でオナニーしてもいいんだけど、沙恵香ちゃんの参考にもなるだろうし折角だからシてもらった方がいいかなって」

「で、でも……うーん…………流石にそこまでは……」

「別に私の事を好きになって欲しいとかじゃないし、ただの練習だと思って……ねっ？お願い？」

「……わかりました。実は……かなり気になってたんですよね……」

最初こそ少しだけ抵抗したものの、結局アタシは自分の好奇心やエッチな気持ちに抗うことは出来なかった。千春さんをイかせる事に了承して、膣内に沈めたままだった右手の中指をまた動かしていく。

ジュプッ……ジュプッ……クチュッ……クチュッ……

膣内の形を確かめる為にしていたさっきまでの優しい動かし方とは違う、性的な意味で気持ち良くするための激しい指遣い。
キツイぐらいに締め付けてくる膣の中で指を前後に抜き差ししたり、一番気持ち良い場所だという膣の行き止まりを指の腹でギュッと押し込んだり、手の平の向きをお腹側に変えてコリコリした子宮口を捏ね回したりする度に、千春さんの膣内からは愛液がどんどん溢れてくる。

「んっ……上手ね、気持ち良いわよ……っっ！……ねぇ、指をもう1本増やしてくれるかしら？」

興奮によってかなり艶めかしくなった声でのおねだりに応えるように、ほぐれきった膣内へ更に人差し指を挿入する。
互い違いに動かして膣内をかき回したり指先で子宮口を挟み込んでみたりと、2本指だからこそ出来る複雑な動きで千春さんを絶頂に追い立てていった。

（千春さん……だいぶ気持ち良さそう…………アタシがオナニーする時だとこうやって親指でクリトリスを……）

「あっ……」

いつもの調子でクリトリスを刺激しようとして伸ばした親指が突起も何も無いつるんとした肌だけを触る。触ってしまう。

（そうだ……千春さんのクリトリス、もう無いんだった……）

ふと心に差し込んでしまった冷たい感情と間違えてクリトリスに指を伸ばしてしまった動きを誤魔化すように、親指で尿道部分の窄まりを軽く撫でておいた。

クチュ……コリッ…………グリッグリッ……

気を取り直して千春さんの膣内を集中的に責めていくアタシ。

２本の指を縦にして人差し指の横側で子宮口を、中指の横側で膣の行き止まりをクチュクチュと刺激する。

手首の捻りも追加して子宮口と膣の行き止まりを同時かつバラバラな動きで愛撫すると、千春さんのあっという間に絶頂に向けて駆け上がっていった。

「ああっ！そうよっ……！そうやって奥の２箇所を一緒に刺激するのが……あんっ……とっても気持ち良いのっ！！」

自分でも両手でおっぱいを揉みしだいたり乳首を摘んだりと胸への愛撫を行いながら、性感に身体を捩らせる千春さん。

ヒクヒクと収縮して指を締め付ける膣の感触からも彼女がもう絶頂寸前の状態なのは明らかだったから、アタシはトドメとばかりに限界まで指を挿入し、膣の行き止まり部分をグリグリと抉るように押し込んでいった。

「あんぅっ！イクっ……あっあっ……良いわっ！！……はぁっ……くぅっ……うぅ……あっ、あぁぁぁあぁんっっっ！！！！！」

千春さんはついに絶頂を迎え、大きな嬌声をあげながら背筋を仰け反らせる。

後ろに倒れ込んでビクビクと痙攣する身体。
上気した荒い呼吸にあわせて大きく上下に動く胸。
痛みを感じそうな程の強さでアタシの指を締めてくる膣。
たっぷりと分泌された愛液でぐっしょりと濡れてしまった座布団。
それら全ての光景が、千春さんの絶頂は決して演技なんかでは無い事を間違いなく証明していた。

「はぁっ、はぁっ………すっごく気持ち良かったわ。ふぅ……沙恵香ちゃん、ありがとうね」

「こちらこそありがとうございます。ちゃんとイケてる千春さんを見れて、アタシもなんだか安心できました」

「なら良かったわ。無くなっちゃった物があるのは確かだけど、こうやってちゃんと残ってる部分もある事を忘れないでね」

激しいオーガズムの直後で気怠げな千春さんと軽く言葉を交わし、アタシは身の回りの片付けを始めるのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「でもね、私達は女の子で良かったと思うのよ」

ほとんどセックスと言っても差し支えの無かったさっきまでの熱が落ち着き、お互いに身だしなみを整えて退室する準備を始めた所で唐突に千春さんが話を振ってくる。

「え、どういう意味でしょうか？」

「こうやって膣を使ってイッた後はいつも考えちゃうのよね、男の人はもっと大変なんだろうなって」

「男の人がカゲニエになる場合っておちんちんを切っちゃうんでしたよね」

「そう、だから立ちションも挿入も出来なくなっちゃうの。私達女の子の場合、そこら辺は変わらないままでしょう」

「確かに……男の人は色々と変わっちゃうんですね……」

雑談として語られる男性のカゲニエ事情。
女であるアタシには直接関係がある訳では無い事だけれども、なんだか興味深くて話に聞き入ってしまう。

「しかもね、実はおちんちんはただ切っちゃうんじゃなくて、身体の中に埋まってる部分まで根こそぎ取っちゃうのよね」

「ね……根こそぎ……」

「おちんちんを根本でちょん切るだけだったなら埋まってる部分が切り株として残るけどそうじゃないのよ。『切り株が残ってたならクリオナみたいに刺激して気持ち良くなれたのに』ってカゲニエ男子の先輩たちがたまに嘆いてるわ」

「そうか……アタシ達は膣っていう女の子としての器官でちゃんと気持ち良くなれますけど、男の人はお尻を使うしかなくなっちゃうんですね……」

「ええ、だからこうしてイッた後はいつも、『女の子で良かった、膣が残ってて良かった』って考えちゃうのよ」

男女によるカゲニエの違い、おちんちんやおまんこを切り取られる前後で出来なくなる事や変わらない事について語り合うアタシ達。

千春さんが話す膣が残るありがたさに共感したりしながら、アタシは退室の準備を整え終えた。

「千春さん、改めて今日は本当にありがとうございました。何から何まで教えて頂いてとても助かりました」

「沙恵香ちゃんの不安が少しでも解消できたなら良かったわ。聞きたいことがあったらいつでも質問してくれていいからね」

「はい、それではこれで失礼しますね」

しっかりと千春さんにお礼を告げて、アタシは部屋を退室する。

陰肉奉納祭まであと一週間、アタシとおまんこに残された時間を大切に過ごしていこうと決意しながら帰路についたのだった。